

文化

絶妙の間音に人情味

広響

コンサート

人情味のある音の世界を探究する人。指揮者広上淳一が繰り出す音楽を聴くと、筆者はいつもこのように感じる。「広上淳一のシンフォニック・ナイト」と題された広島交響楽団第343回定期演奏会でも、その印象は変わらなかった。前半はスウェーデンの作曲家、アッテルベリの交響曲第6番。コンクールで優勝し、多額の賞金を得たことから「ドル交響曲」と呼ばれるようだが、このシニカルな異名が音楽に関わりを持つとすれば、作品全体の根幹ともなっている、しやれつ気だろうか。

第343回定期演奏会

哀愁を帯びた旋律の裏で執拗しつとに刻まれる拍、第3楽章冒頭からの皮肉まじりの旋律の反復には思わず失笑した。作者の性格がよく伝わってくる。ただし、こうしたユーモアあふれる表現こそ広上の得意とするところのはずだが、今日は少し重く単調にすぎる。特に遊び心満載の第3楽章では、もっとおどけた表情がほしいところだ。後半はブラームスの交響曲第4番。先の作品とは対照的に、情熱的だが生真面目な作者の内面が音楽の構成にも表れた作品。甘く狂おしい旋律が均整の取れた



広上淳一の指揮で人情味あふれる音色を奏でた広響第343回定期演奏会

形式の内部で紡ぎだされる。こうした叙情あふれる音楽では特に、

広上の解釈はわかりやすく聴き手にも伝わりやすい。第4楽章の再現部の入りで見せた情熱的な間の感覚など、その最たるものだった。その点、広上は聴衆との一体感を生み出しやすい指揮者だといえよう。

一方で、われわれの知らない世界、つまり想像力を駆り立てる音楽という点では物足りなさも感じる。再演芸術であるからこそ、演奏では想像力や創造性も求めたい。

アンコールでは「聴衆と退団する奏者のために」シューベルトを演奏。情の伝わる美しい演奏で、こよい最も印象に残る演目となった。

(能登原由美・「ヒロシマと音楽」委員会委員 東京都)